

雨ざらしの大仏に再興志す

公慶上人没後三百年の昨年末、奈良国立博物館で特別展があり、一般に知られていない公慶の姿が紹介された。目についたのは公慶が高山の法楽寺で、二度にわたり大仏修復の大願成就を祈った「立願状」貞享二（一六八五）年と翌三年）、法楽寺の子院、上之坊から銀子を借りた「借用状」（元禄十四（一七二二）年）などの書状だ。「公慶と高山との強いつながりを感じられる」（西山厚「特別展東大寺公慶上人」という。法楽寺を支えたのは茶筌師たちである。



鷹山氏の菩提寺、法楽寺。茶筌堂。公慶上人は大仏再興の大願成就を祈った

公慶は父祖の地に大仏再興の力の源泉を求めた。

十三歳で東大寺に入った公慶は、雨ざらしの大仏を拝し再興の志を發したという。永禄十（一五六七）年、松永久秀らの兵火に大仏殿が炎上、大仏は頭部が応急修理の木造銅板張りのまま百年余りも露座にあった。

公慶が勸進を始めて七年半、元禄五

（一六九二）年春、大仏の開眼供養が営まれ、宝永二（一七〇五）年閏四月には大仏殿の上棟式が行われた。公慶はお礼のため江戸に向かう。十八回目の江戸行だったというが、同年七月十二日、病を得て江戸で遷化、五十八歳。「大仏修復まで安臥」せず「夜も坐って眠った」という執念が身体を蝕んだ。遺体は大和へ運ばれ、東大寺北の五劫院に葬られた。大仏殿の落慶はそれから四年後である。

佐保路沿いに興福院（江戸初期、尼辻から移転）という尼寺がある。その第四世、教養清信尼は公慶の実姉である。大仏殿の棟上げの時、興福院から昆布や路など祝い品が届けられ、公慶は親しく「こうけい」と平仮名で署名した礼状を送っている。興福院には鷹山氏関係の多くの文書が伝えられるが、父頼茂



尼辻の興福院墓地にある公慶上人の母の供養碑。碑面裏に公慶、教養清信、鷹山頼忠3兄弟の名が刻まれる

が娘に託したのだろうか。

鷹山氏の最後の武士、頼茂は貞享二（一六八六）年七月、八十五歳で死去。廃田楽寺に五輪塔がある。二輪氏一族出身の頼茂の妻は、公慶の大仏開眼供養を見届け元禄五年八月、七十七歳で亡くなった。興福院故地の尼辻墓地に供養碑がある。碑面裏に「慈母報恩謝徳」と記し、公慶、教養清信、鷹山庄蔵頼忠（長兄）の三人の子の名が刻まれる。

大仏発願の聖武天皇の遺徳を偲ぶ東大寺聖武祭は、時代装束の女官や花笠姿の稚児行列（五月一日）かはなやかだが、異様な風体で立つのは僧兵姿の高山無定人衆だ。祭への奉仕にとどまらず、鷹山氏墓所供養、東大寺、興福院への年賀挨拶、公慶上人の命日供養と、茶筌師たちは今も主家筋への礼を欠かさない。